

第2学年郷土学実践事例

単元名

高月の昔話

単元目標

- ① 地域の人から高月に伝わる昔話を聞き、ふるさとである高月町への愛着の気持ちを育む。

単元について

児童は、幼いときから日本の昔話には触れているが、身近な字の昔話を聞く機会がなく、この単元で、初めて地域に伝わる昔話と出会う。

教師ではなく地域の人から、ゆったりとお話を聞くことで、昔話との出会いを大切にしたい。お話の中に、身近な地名が出てくることで、より親しみをもち、興味がわくであろうと考える。

聞いたお話を、自分の絵と文で表すことで、内容を理解していくと共に、自分の住む高月の良さに気づくであろう。更に、作った作品を交流する中で、地域の良さと同時に、友だちの表現の良さにも気づかせたい。

単元を通して、地域の人・文化に触れ、児童が「高月っていいな。」と思えるようにしたい。

単元計画

- ① 高月に伝わる昔話を聞く。
- ② 絵本や紙芝居等に表現する。
- ③ 作った作品を紹介し合う。

単元の流れ

| 通程 | 学習内容 | 学習活動 | 教師の支援・児童の様子 |
|----|-----------------|--|--|
| | ① 高月に伝わる昔話を知る。 | ○高月に伝わる昔話を聞く。(1・2年生で) ・学校支援ボランティアの方から、次の6話を聞く。 『北長猫と行者』(馬上) 『赤坂山の金の鶏』(馬上) 『浄照寺のきつね』(宇根) 『モロコ祭り』(東阿閉) 『夜叉ヶ池の祟り』(高月) 『おばさんときつね』(高月) |  <p><様子> ・児童は、自分の字や身近な字に伝わるお話ということで、興味深く聞いていた。 <支援> ・お話し会の様子をビデオとカセットに記録し、次時の活動の支援に使う。</p> |
| | ② 絵本や紙芝居等に表現する。 | ○聞いた話を、絵本や紙芝居に表す。(グループで) ・グループで、一つのお話を選び、絵本や紙芝居に表す。 ・一人1ページを作る。 |   <p><支援> ・聞いたお話を、場面に分けて絵本や紙芝居にしやすいようにして、掲示しておく。 ・場面から、だいたいのあらすじを思い起こさせ、絵や文に表すためのヒントとなる言葉や写真を提示する。 <様子> ・場面ごとのポイントとなる言葉をきっかけに、自分の言葉で文章に表していた。</p> |
| | ③ 作った作品の交流をする。 | ○作った作品を紹介し合う。(お話し会) ・作った紙芝居で、お話し会を開く。 ・い組の紙芝居をろ組の児童が、ろ組の紙芝居をい組の児童が聞く。 |   <p><支援> ・一人ひとりが自信を持って話せるように、教室の中に、5グループの発表場所を設け、小グループで順番に聞いて回るようにした。 <様子> ・同じお話を選んでいるグループがあったが、様々な表現(絵・文)があり、それぞれの良さを感じることができた。 ・小グループでのお話し会であったため、どの子も、緊張することなく発表していた。</p> |

授業の観点

- 高月の昔話を、興味を持って聞いていたか。
- 高月のよさに気づくことができたか。
- 高月の昔話を、進んで紹介することができたか。

子どもの変容・指導の成果

地域の人から、身近な地名の昔話を聞くことにより、興味をもって聞き入っていた。「高月にも、昔話があるんや。」と新たな発見をし、「高月ってすごいな。」「ぼくの字ってすごいな。」と感じる児童が多かった。お話をして下さった方から、「他にも、たくさん昔話があるよ。」と教えられると、「もっと知りたい。」と興味を持つ児童もいた。

紙芝居や絵本に表すためには、具体的な場面を絵にし、あらすじを自分の言葉で文章にする必要がある。そのため、教師の支援として、場面を分けたり、場面に必要な言葉や写真を提示したりした。児童は、それをヒントにして、自分なりの表現でお話を作り上げていくことができた。

課題

全5時間で活動を仕組むには、無理があった。特に、お話を聞いてから、紙芝居や絵本にするまでに、多くの活動が必要であり時間が必要である。昔話の場面を絵に表すには、昔のくらしや服装などを調べる必要がある。昔ならではの言葉の意味も調べて理解する必要がある。実際、児童から「どんな服を着てやったん?」「モロコってどんな魚?」「夜叉がヶ池ってどんなところ?」など、様々な疑問が聞かれた。今年は、この部分を、支援という形で教師が準備してしまったが、活動として広げていけるのではないかと考える。

外部講師・地域連携

学校支援ボランティアの方